

「厭離穢土 欣求浄土～家康公の平和思想～」

大樹寺

責任役員 成田 敏 圀



おはようございます。会場がお寺の本堂でございますので、誠にすみませんが最初にお十念、南無阿弥陀仏を唱えさしていただきます。如来大慈悲、哀愍護念、同唱十念、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、ありがとうございます。年末ぎりぎりの所で大樹寺にご参詣いただきまして大変ありがとうございます。今日は73歳におなりになった天皇お誕生日の実に素晴らしい日であります。それから今日、12月23日ですが、あと3日後が家康公のお生まれになった日になります。そういう意味で今日の日程を決めさせていただきました。家康公は今年464歳におなりになるわけなので、天文11年1542年12月26日、寅の年、寅の月、寅の日にお生まれになったというふうに伝わっております。そういう日を選ばさせていただきました。それからひとつお断りしておきたいんですが、毎回、岡崎学の会場が松坂屋の上のコミュニティサテライトオフィスですが、90分という事になっておりまして、実は本日も10時半から12時までの90分という事で、その半分を講演の時間に費やして、残りを拝観、見学といった形になります。実を申し上げますと「厭離穢土、欣求浄土」家康公がなぜ平和思想をもたれたかという、その原点のお話をするには、45分では少々足りないものですから、うんと縮めまして主要な所だけにさせていただきますましてご了解を得たいと思います。

家康公という方は昔から例えば「織田がこね、羽柴がつきし天下餅、座りしままに食うは徳川」といったような、徳川家康公に対してあんまり良い評判が流れていなかったような気がしております。またあの、信長の場合は「鳴かぬなら殺してしまえホトトギス」と言った言葉もありますし、秀吉公の場合は「鳴かしてみせよう」と言う事、それから家康公の場合は「鳴くまで待とうホトトギス」と多分にお三方の性格を如実に表した言葉だろうと思います。たまたま終わりましたが、NHKの大河ドラマ「功名が辻」、あの場合の家康公もどちらかというあまり良く描写されていなかったような、私個人的にはそういうような感じを受けておりますが、いずれにしても家康公が最終的に腹の中に持っておられたのは「堪忍」という言葉だと思えます。そういうお気持ちは何故家康公の気持ちの中に芽生えたかといったような事も含めてお話したいと思えます。この表紙に書いてありますように、戦国乱世に生まれまして、6歳から19歳まで人質生活を送られ、その前には自分の母親、於大の方ともその当時の戦乱で、別れなくてはならなくなってしまいました。その前にお祖父さんの清康公、お父さんの広忠公も戦国乱世の生け贄となってしまって、二人とも家臣に殺されてしまっておるわけなんです。それから自分の妻の築山御前、自分の子供の信康、これもやはり戦乱の生け贄となってしまったといったような事がずっと小さい時から続いたわけなんです。そこら辺を概略申し上げて、出来るだけ中心の問題だけに今日は絞ってお話したいと思えます。

まああらゆる意味で家康公は戦国乱世のひとつの犠牲になったという事が考えられ

ます。日本の歴史の中で、中世の時代というのは約400年あったわけなんですけれども、そういう古代国家から封建国家に移行する時期に、今の家康公という方の名前が出てくるわけなんです。大樹寺と家康公との繋がりというのがそこら辺から始まるわけで、特に南北朝、室町時代の文明7年、1475年になりますが、家康公の先祖の松平家、四代親忠公によりこの大樹寺というものが創建されたという事でありまして、大樹寺が創建されて約530年になりますけれども、現在の住職が第63世でございます、ご住職は堀田岳成さんと言います。名古屋の有名な私学の東海学園の理事長を長くお勤めになっていらっしゃる、現在名誉学園長という方が現在の63世です。その長い歴史の中で、とにかく徳川時代265年というかつてない、一政権で265年という長い長い大平の御代を築かれたというのが徳川家康公、当時元康でございます。19歳の時にこの大樹寺の登誉上人から「厭離穢土、欣求浄土」の意を授けられまして、それから家康公が自分の志を立てて、天下大平の御代を築くためにはどうあるべきかといった、そういうような気持ちを持たれたという意味で、今の265年の礎を作ったのがこの大樹寺での13代登誉上人と当時の元康との問答でございます。この問答は皆さん方の資料に付けておきましたけれども、あまり世に出ておりません。漢文で残されておりますけれども、それを読み下し文にいたしました。後ほど説明させていただきます。そもそも徳川將軍家の先祖である松平家というものは、先祖が八幡太郎義家の末裔だということで、今でいう群馬県太田市にあたりますが、上野の国の新田郡にお生まれになったということです。当時は南北朝の時代でありまして、激しく対立していた時代でありました。新田義貞に先祖がついておったわけですが、足利尊氏に敗れて諸国を遍歴したという事があります。松平初代の親氏公がそういう意味で徳阿弥と称して諸国を時宗の僧侶として廻り廻っておって、最終的に松平郷の松平太郎左衛門さんの娘婿に入られた。これは皆さんよくご承知の事だと思います。非常に武芸に秀でて、しかも慈悲の厚い方であったという事なので、初代親氏公の時代からいわゆる天下大平の世を願っておられた事が文献に残されております。当時としては天下が一日も穏やかにならないので、万民が非常に苦しんでおるといって時代でありまして、親氏公自身が自ら10代の先には必ず天下を大平にして、そして安穏な世を作りたいという事を家臣の前で誓っておられるわけですね。その時代から大体南進政策をとって進んでおられて、これは二代泰親の時代になりますけれども松平から岩津、岡崎城を経て、三代信光の場合は大給とか保久、それから安祥城ですね、今の安城まで南下しておられる。四代親忠公が岩津城から安城へ移られた。たまたまその時代に応仁の乱、井田野の合戦等々があったわけで、大樹寺創建にそれが纏わってくるわけです。応仁元年の8月に井田野の合戦で多くの敵味方が討ち死にをしたという事がございました。すぐ近くに千人塚というのがございますね。この西光寺さんのすぐ南になりますけれども、そこへお奉りをしたんですが、その後、戦死者達の亡魂が非常に騒ぎだして、塚が鳴動をしとき声が上がるという事があり、近辺には悪病が流行したという事がありましたので、その亡霊を弔うために親忠公が勢譽愚底上人を招いて17日間の別時念仏をされて、それで亡魂がおさまったという、そういうきっかけがありまして、この大樹寺というものを勅許を得て作られた。これが文明7年の1475年にあたりますが大樹寺が出来たわけでありまして、大樹寺の開山上人というのが勢譽愚底上人になるわけで、この大樹という名前はですね、大きい樹木の樹、大樹というのは、

中国の將軍という意味でありまして、そういう意味からも松平の子孫に将来將軍を出すという念願を込めて勢譽愚底上人が名づけられました。大樹寺というのは全国にもここしかございません。他にいろんなお寺さんの名前、例えば西光寺さんというのも随分たくさんありますし、それに似通った西方寺さんというのも全国にたくさんありますが、大樹寺というのは日本全国ここしかございません。

また、浄土宗には、結縁五重というのがありまして、坊さんになるためには五重相伝、いわゆる浄土宗の奥義を受けるんですが、在家の方に五重相伝を授けることを結縁五重といいまして、開山勢譽愚底上人が松平親忠公に結縁五重を相伝したところから、大樹寺は浄土宗の五重相伝根源道場として知られております。松平家は代々その後、浄土宗たるべき事が誓約されてありまして、後ほどご覧になっていただきますが、歴代將軍の等身大の位牌というのを14代將軍までは全部浄土宗です。15代將軍徳川慶喜さんは一旦浄土宗を辞められており、あの方だけは神道になって大樹寺には位牌はございません。その子孫の方に問い合わせを致しまして、徳川慶喜將軍の戒名と生前の背の高さをお知らせいただければ大樹寺で位牌を作りたいと申し上げましたところ、そういった返事がきまして神道ですね、ですから徳川慶喜大人命という事でありまして戒名がございません。あと境内の方で松平8代のお墓もございまして、ご覧になっていただきますが、今の4代親忠公がここへ歴代松平家の墓を作ろうということで8代の墓を作られまして、それまで高月院にありました前3代の墓から、分骨致しましてこちらへ移設してあります。5代は長親、6代は信忠ですね。

それから問題は7代目、これが家康公のおじいさんにあたります、清康公。この方からですね大樹寺というものと松平家というのがより密接な繋がりを持ってくるわけなのであります。非常に清康公は勇猛果敢な武将でありまして、三河一円を統合されて、そして最終的には尾張にまで出兵をして織田信長のお父さん、信秀と戦うまでの力をつくったわけですが、たまたま尾張に出兵しておった時に、家臣阿部弥七郎にひょんな勘違いから殺されてしまいました。殺されたその年にあとこれもご覧になっていただきますけれども、国の重要文化財になっております多宝塔が清康公によって建立されました。ちょうど出て墓地を南の方へ行っていただいたところにあります。1535年天文4年ですが、12月5日に尾張の守山城で家臣に殺される直前に多宝塔を建立され、ここで祈願されてそして守山城へ出兵しておられます。そういう状態で、多宝塔の心柱に奉加としまして、「大旦那世良田次郎三郎清康安城四代岡崎殿」と書かれております。現実に清康公が建立されたという事が残されてありまして、これが国の重要文化財として現在大樹寺に残っております。国の重用文化財は建造物では今の多宝塔、書画の方で冷泉為恭の襖絵が124点あります。これも重要文化財として残されております。それから県の文化財として山門、鐘楼、総門が建造物として残されてありまして、また後ほどゆっくり見ていただきたいと思います。

続いてお父さんの広忠公になるわけですが、清康が討ち死にをした時、まだ元服前の10歳という事で、その時代から非常に松平家というものが急転直下、力を無くしていく時代に入ってくるわけです。西の方では織田に攻められ、東の方には今川がいるという事で、どちらにつくかという事になった場合に、当時今川の勢力が非常に大きかったものですから、今川側について、最終的に広忠公は今川の一武将という形になら

ざるを得なかったという事になります。天文18年にその広忠公も家臣に殺されてしまったという事です。

いよいよ家康公に話に移るわけなんですが、天文11年12月26日にお生まれになって、先ほど申し上げましたように今年464歳、あと3日後に迫っております。幼名竹千代と言うわけですが、お母さんの於大の方が非常に傑物でありました。実は於大の方のお父さんの水野忠政が生存中は良かったんですけども、亡くなった後、その息子の信元がそれまでは今川方に着いておったのが敵方の織田へ寝返ってしまったという事があって、夫の広忠は怒って自分の妻である於大を離縁するわけですね。この時に家康公、竹千代ですが3歳という事です。その時から苦難の道が始まってくるわけです。当時信長の父である織田信秀の勢力も非常に強いものがあって、三河を併呑しようというような事から、岡崎へも攻めて来るわけです。そうなりますと今川の力を借りて、それを防ぐ以外にないという事でありまして、今川から人質を求められて、竹千代がいよいよ6歳にして駿府の今川へ人質として差し向けられます。その途中で田原の戸田弾正というのがありまして、この謀によりまして、途中で人質として駿府へ向かう竹千代を拉致してしまうわけですね。今の北朝鮮の拉致とは違いますけれども、拉致されて熱田へ送られてしまう。そこで織田信秀に渡されて、その子信長といわゆる兄弟のような形の付き合いが始まってくるわけですね。これは将来非常に家康の為にはプラスになってくるわけなんですが、そういった事がありまして、一時は織田の人質となったんですけども、人質交換というのがありまして、天文18年にまた再び駿府の方へ送られる。永禄3年1560年ですが、桶狭間の合戦で今川義元が討ち死にされるまでの間、苦難の道を家康公は歩まれたという事になります。竹千代は14歳で元服しておりまして、今川義元の一文字を受けて次の名前が次郎三郎元信になるわけです。4回名前を変えておりますけれども元信になった時の翌年に岡崎へ一旦帰りまして、大樹寺にお参りしております。先祖の墓にお参りして亡父の法要を営んでおります。その後、今川義元の姪であります関口刑部少輔の娘を娶った。これが後の築山御前ですね。その時に結婚して名前をお祖父さんの清康、非常に英武を慕ってお祖父さんの清康の康をもらって元康。19歳の時にはこの名前です。元康になっております。永禄3年5月、上洛を目指しました今川義元が大軍を率いて駿府を出発する。そうして5月18日、この時は今川の一武将であった元康は大高城へ兵糧を入れて、城を守っておったわけですが、丁度昼頃に今川義元が桶狭間に陣を敷いておって、そこへ織田信長の奇襲にあって討ち死にをしてしまったという事になるわけで。今川勢は総崩れ、今川義元が討ち死にをしたという事はその時点では元康はまだ知らないわけです。ただその夜、自分のお母さんの父親である水野の息子、叔父にあたりますかな、水野信元、これが織田方の武将でありますので、そこから使者があって、今川義元が討ち死にをしたという事を初めて知るわけです。それは敵方からの通報であるものですから、躊躇するわけなんですが、密偵を飛ばして調べましたところ間違いのない。そういう事で夜中に元康が大高城を密かに出発をして、真夜中に多くの敵を避けながら大樹寺に逃げて帰ってくるわけですね。この時付いてきた近臣わずか18人という事が記録に残されておりますけれども、その間に敵がまた追い迫ってきて大勢が鉄砲を撃ちかけてくる。命からがら大樹寺へ逃げ帰りました。

当時のお寺というのはいわゆる一種の城でありまして、周辺が全て囲まれておって、

その当時大樹寺も約500名くらいの坊さんが居たわけで、現在の大樹寺小学校のある校庭一帯に約10ヶ寺、塔頭寺院がありまして、そういうところにもお坊さんが住んでおったわけです。そういう連中が守りを固めたわけでありまして。ただ元康としてはそこで、もはや自分の命はこれまでであるという事を考えまして、先祖の墓前で切腹自害をしようという事をその時の住職13代登誉上人に告げるわけですね。登誉上人は名将たるものは命を粗末にははいかんという事で、そこで皆さん方にお渡しをしました元康との問答がございますので、ちょっとご覧になっていただきたいと思います。大意だけ申し上げます。「師曰く檀主の危難あるは法門の厄に係れり」師というのは登誉上人の事です。いわゆる檀家さん、大檀家さんが危難にあった場合は、いわゆる大樹寺としても放かっておくわけにはいかん。「公慮りを爲さゞれ吾身命を捨て公を護衛せん」心配しなくても良いと。我身命を捨て、公を、公は元康の事ですね、守りますと。「即ち緇素若干衆に命じて、寺門を固めしむ」ここに緇素としてありますのは黒と白という意味でありまして、黒が僧侶を表して、白は俗人を表す。緇素、僧侶と俗人が若干衆に命じて寺を固めると。「公大に異しむ時に師白布を以って旗を製し之に題して厭離穢土欣求浄土と 是に於て師公に問ふて曰く」「君弱冠より戦場に向ふ其心唯だ敵を殺害するに在るか」あなたは若い時から戦場に向かっているけれども、その心はただ敵を殺すだけにあるのかと。「公の曰く武人の心実に唯然り」元康は武人の心はただその通りであると。「師曰く殺害なんの爲ぞ 曰く是れ他に非ず勇を振り功を樹て城を抜き國を奪はんとなり何ぞ」殺害を何の為にするのかという事ですね。これは他にあらずと、自分で勇気を振り起こして、功をたてて、城を落として、國を奪わんとすると。どうしてそれをするんだと。「止だ其をしも云んや尚を竟に天下を領せん者なり 曰く竟に天下を領して是れ亦た何んするものぞ」最後は天下を領せんという事が目的である。遂に天下を取ってこれまたどうするんだという問答が続くわけですね。「武權を執るが如きは 則門葉を興隆し子孫を榮耀し名を後世に挙げて父母を顕さん而己」要するに自分の家を興隆して子孫を繁栄させて名を後世に挙げて父母の名を表さんと。登誉上人は「天に得ざるの國を劫奪するは之れ奸盜之所爲なり」天に得ざるの國を強奪するというのは、これ盗人の所為ではないかという事ですね。「たとひ運を啓き一たび天下を領すとも非道にして得ば則ち何ぞ子孫に傳ふる事を得ん 己れ獨り榮華に傲るとも猶を一陽の春夢の如し命終の後には必ず地獄楚毒の苦みを受けて何の益か之れあらん」例え運があつてひとたび天下を取ったといつても非道にしてそれを取れば即ち子孫に伝わることを、これひとり榮華に傲るともなお一陽の夢の如しと。命終の後には必ず地獄に落ちるんだぞという事。こういう事を懇々と説くわけです。

最終的には万民のために天下の父母となって万民の苦しみを無くするというような事をしていかなければいけないという事を説くわけでございます。そういうことを懇々と諭されて、時の元康自身は、その大慈大悲の心というもの、仏教の心というものを初めて悟る訳であります。そうして将来安定した日本の國を作るためにはどうあるべきかという事を悟ったわけですね。元康は大いにそこで感激して悟って、そうして住職から十念を授け、先ほど言いました「南無阿弥陀仏」ですね、それを受けてそうして敵に対処するという形になるわけでございます。折から織田の軍勢が大樹寺を取り囲んだわけですが、登誉上人は既に約500名の僧侶を集めて武器を取らせて、そして先ほど書いた

白い布、白布に「厭離穢土 欣求浄土」と大書した旗を立てて、一山挙って敵に対処した。家康はその後旗指物、例えば武田の場合は「風林火山」だとかいったのがありますが、家康公はその後の戦陣には必ず「厭離穢土 欣求浄土」の旗指物を使っておられます。それ以来家康公は仏の道に、要するに仏道に寄依され、戦いのある毎に暇さえあれば「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」というのをいつも常時書いておられて、将来念仏將軍という事まで言われた方ではありますが、ちょうど今、前に出しておきましたが、一枚大樹寺に残っておりますけれども、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と書いてありまして、一番最後、この左の数の下、「南無阿弥陀家康」と書かれております。これは大樹寺だけではありません。各地に残されておりますね。大樹寺としては寺宝として保存してあります。そういう事で生涯念仏將軍と言われてお亡くなりになる直前まで日課念仏六万遍という事もしておられた方でございます。

まあそれはそれとして、総門の門を抜いて、打って出て敵勢を打ち払った訳ですが、総門の門、総門といいますのは今の大樹寺小学校の南門です。総門の門を開門と言って家康公が刀で二太刀門を切った、その門も貫木神として大樹寺でお祀りしてありますが、そういう事で一応敵勢を追い払いました。その時の岡崎城はもう既に今川方が逃げ帰ってもぬけの殻と。空いた城なら拾おうという事で、23日の日に自分の古巣であります岡崎城へ入城されて、自立の第一歩を踏み出されたという事でありまして、大樹寺小学校は校訓が自立だそうでございますが、そういう事でありまして、その後元康は登誉上人から、無念無想で南無阿弥陀仏を唱えておれば他力本願の力で守られていくという、そういう軍法によって勝利を挙げられたという事でありまして。

時間が段々迫って参りまして端折りますけれども、岡崎城へ帰られた後、慶長5年の1600年関ヶ原の合戦で勝利を得て、その後徳川家康公は右大臣、征夷大將軍となられました。寺号にこめられた親忠公と勢誉上人の願いは大樹寺創建以来128年。その悲願は達成されたという事になります。慶長10年征夷大將軍を秀忠公に譲って、自分自らは駿府城で大御所として最後の最後まで最高決定権を持っておられた。最後は病状が悪化していくわけですが、もう年が年になりまして亡くなられたのは駿府城で享年75歳でありました。大樹寺はお生まれになった日のお祝いはしなくてですね、亡くなられた日に必ず毎年法要をやっております。御神忌法要というので、今年は391回忌です。法要を4月17日に終わった所でありまして。亡くなられた直前に遺言として「死後、自分自身の遺体は久能山にお祀りせよ。葬儀は江戸の増上寺で行え。位牌は三河の大樹寺へ祀ること」という事でありまして、歴代將軍の等身大の位牌というのは、前の將軍がお亡くなりになりますと後の將軍がそれを作られて、江戸から大樹寺へ持って来られたという形になっております。久能山東照宮へ遺体が入られまして、その後1年経ったら日光東照宮へ移して、日光で関八州を自分が鎮守するという事も言い残されておりますね。そのお亡くなりになります時には大樹寺の当時の17世の了譽上人が枕元についておられたという事でありまして。現在の等身大の位牌というのは当初のものでなくて、家康公の13回忌の時に自分の子供、九男で尾張の初代城主の義直が作られたものであります。それが現在お祀りしてあります。

いずれにいたしましても昔からローマは一日にしてならずという言葉がありますように、この「厭離穢土 欣求浄土」というものは人類永遠のテーマだというふうに私

は思っておりますし、祈りでもあります。戦乱の根となるものは全て所有欲からくるわけで、家康公はその後半生でこれに気づいておられました。所有したかにみえるのは実は預かり物であると、人間は元来無一物というのは仏教的な考え方でありまして、封建制度そのものもそういうような思想に基づいて 265 年という一政権としては実に長い平和な御世をつくられました。観無量寿経にあります「天下和順日月清明風雨以時災厲不起国豊民安兵戈無用」いわゆる天下が非常に和やかに治まって「兵戈無用」武器は一切いらぬというような思想が観無量寿経にも載っておりますが、太平の世づくりのため実に家康公自身は一生身を削られたという事があります。時間が参りましたので、これで終わらせていただきます。後ほど二手にお別れになって中を見ていただいて外へ行かれる方と、それから外を最初にご覧になってまた中に入ってください方というふうにごゆっくりと見ていただきたいと思います。どうもありがとうございました。